

## 各種調査報告から

# 子どもの生活実態をみる

河合 靖久

2006年から2011年にかけての各種「子どもの生活調査」をベースに、小学生の生活実態を探ってみました。

### 1、子どもの生活実態

(1) 生活が夜型になっている

・小学6年生の約3割が11時過ぎに就寝する

・中学3年生の約4割が12時か、それよりも遅い

夜10時以降の就寝の割合は、20年前の2〜4倍に増え、年齢が上がるほど増加しています(資料1)。

就寝時間が遅くなるほど、「学校があまり楽しくない」「授業で『わかる』『できる』と感じていない」「朝食を食べない日が多い」「平日にテレビ(DVD)な

どを3時間以上見る」の割合が増えています。

(2) 朝食抜きは、男子に増加

朝食を毎日食べている小学生は80%を超えているが、「食欲がない」「時間がない」の理由で朝食欠食率は、男子で増加し、睡眠不足が推定されます。

(3) 一人で食べる「孤食」は増加

朝食を一人で食べるという小中学生には「何もやる気が起きない」という傾向が強く、親子の意識の差も大です。

(1)(2)と他の要素との関係では、「朝食を毎日食べ」て「あまり夜更かしをしない」子どもほど、「学校がとて楽しい」、授業で「わかる」「できる」と感じています。また「家庭学習は宿題がなくてもほとん

ど毎日する」などの割合も高いようです。

(4) 学校が楽しい

一番の楽しい理由は、「友達と遊ぶ、おしゃべり」で、楽しくないわけは、「疲れていて、朝起きるのが辛い」、「家で一人で過ごすほうが楽しい」でした。

(5) 家庭内での手伝いや仕事

小学生で約50%、中学生で約30%を占めているが、家庭内で決められた役割や仕事のない子どもも多くいます。

\*健康、生物としての快眠について

快食、適度な運動、快眠と関わり「便通の時間や質」は、自分の健康状態を知るための大事な体内からのメッセージなのですが、適切な資料が見あたりません。

(6) その他の事項

平日のテレビ等を「3時間以上視聴」するという割合は、4年生で14・3%、6年生は25・5%を占め、中学生とほぼ同じです。

自分(たち)の部屋を86・4%が持ち、その部屋にテレビがあるという子は31・6%(\*実態と大人の意見は食い違っています)。

テレビ視聴・ゲーム、携帯電話やパソコン、メールなどの時間は増えており、子どもたちは「孤立しなが

ら」「友達とのつながりを求める」課題を抱えています。

小学生の約25%、中学生の約50%、中学3年は約60%が学習塾に通っています(資料2)。

母親からも「先生、いつ宿題やお手伝いをさせれば」と嘆かれるほど、子ども親もゆとりがありません。

\*調査の時期や方法・質問の仕方では結果の数値や回答は大きく変わりますが、子どもの実態の傾向を示していると考えられます。

身近に子どもと交流し、会話や観察を通し「子ども理解」をさらに深める必要が感じられます。

2、「早寝早起朝ごはん」運動で改善も(資料1)

これまでの教育運動や、父母の取り組みで「基本的生活習慣の乱れが、学習意欲や体力、気力の低下の要因で、適切な運動、調和のとれた食事、十分な栄養・睡眠が大切」なことが指摘されてきました。

この国民的な認識を文科省は、「早寝早起朝ごはん」運動として提唱し、展開しました。

・小学生は「7時以前」に起床する子が53・2%から70・1%に増加。「23時以降」に就寝する子は26・

3%から21・4%へ減少。早寝早起きの傾向は強まりました。

・「朝食をとらないで学校に行く子」、「好きなものだけを食べ、嫌いなものを残す」、「栄養ドリンクやサプリメントを飲む」も減少し、食事に気を使うようになりました。しかし、中、高校生では「ダイエットのために食べる量を減らす」も増加しています。

この内容は「食事等調査報告書」10年（資料3）でも、

- ・学校給食が大好き、残さず食べる児童生徒の増加
- ・朝昼夕三食必ず食べる意識の増加

・授業以外で運動する児童生徒は、やや増加と、改善の様子を裏付けています。

子どもたちの健全な成長と将来を愛えた国民的な要求が、具体的に分かりやすい目標と、現状の改善を願う父母の努力が、学校・地域と、自治体や企業も巻き込んだ運動を推進し、成果をあげたと言えるでしょう。

### 親子関係にも改善が

「父親との会話、母親との会話が高まった」「友だちのことについて」の話題は、増加幅が大です。

一方、「将来や進路のことについて」などの会話は

あまり増加せず、高校生では若干減少しています。親との肯定的なかかわりが増加、否定的なかかわりが減少しました。（ベネッセ、2009年）

### 3、保護者や教員の意識・考えについて

#### ―家庭・地域・学校の連携（資料2）

ほとんどの保護者が、子どものためには家庭・地域・学校が連携・協力することの必要性を感じています。

・家庭・地域・学校が連携・協力し合うことは、「とても必要だと思う」「ある程度必要だと思う」と保護者の97・6%が答えています。

保護者・教員とも、ほぼ同じ認識でした。

・約20%の保護者が連携・協力がまだ十分ではないと感じています。

#### 教員から見た子どもの実態について

「人間関係やコミュニケーション能力の低下」「嫌いなことや苦しいことを我慢できない」「子どもが増えている」と感じている教員の割合は、90%以上です。

また、「しつけや基本的な生活習慣が定着していない」「善悪の判断やルールを守ることができない」「学力の二極化傾向が心配」などについて、多くの教員が

その傾向を感じています(資料2)。

この部分は、教員(学校)側からの一方的見方ともとれるが、子どもの成長という共通の目的のため、課題解決に向けて信頼関係に基づく連携・協力の仕組みを築く努力が求められているのではないのでしょうか。

#### 4、気になる項目について

・「イライラする」の不定愁訴は、小中高で増加  
・学級担任の心配度は上昇。

児童生徒の生活習慣や身体状況(小学校では、偏食、睡眠、運動不足、欠食、小食、肥満など)

・朝食欠食が、保護者に増加傾向

「早寝早起き朝ご飯」の運動による「生活の改善」の結果にもかかわらず、次の課題が残ったのではないかと考えられます。

\*子どもの生活基盤の家庭は…

子どもが育つ、親・家庭の生活が崩され、揺らいでいます。親(大人側)の労働の不安定や、貧困の拡大、賃金格差などが家庭を直撃しています。

直近の報道でも、日本の子どもの貧困率は14・9%(国連)で、先進国のなかでも高いそうです。

教育の課題のすべてが社会や経済の不安定さから起きるわけではありませんが、親・家庭・地域の状況が安定したなかで、子どもは育てられるべきです。

\*「学校」の今は…

2010年に「過度に競争主義的」(国連)と三度目の指摘をされた「学校制度および学力にかんする仕組み」の再検討・解決の方向は見出されていません。

現在の学校現場は「効率よく、競わせる」ことではなくても、「励まし」「育てる」ことは至難のようです。

全国学力テストを始め、学校独自の標準学力検査(相対・絶対評価法の2種)や知能テスト、市販のテストやプリントに加えて、県・市から配信されたテスト問題に応答し、改善しなければなりません。

テストには、それぞれの目的があり上手に使い分ければよいのですが、テストの正答率を上げるために「何回も復習」や「事前・事後・再指導」を強調(資料4)されても、テスト問題のためのテスト、テストに次ぐテストで、自分で「気付き、発見し、励まされる」学力は身に付きにくいのではないのでしょうか。

子どもを、権利を持った人間として尊重し、子どもの実態と意見にさらに関心をよせたいものです。

(資料1) 「子どもの生活リズム向上ハンドブックーみんなで早寝早起き朝ごはんー」(文科省、2006年)

(資料2) 「長岡市の児童生徒・保護者・教員意識調査」

(長岡市2006年)

(資料3) 「児童生徒の食事状況等調査報告書」(日本スポーツ振興センター、2010年)

(資料4) 「平成23年度のアプローチ結果から」(web配信集計システム活用・授業改善に効果)」(新潟県、2011年)

(所員・かわい やすひさ)

(吉)

## 千葉県知事選、

### 三輪定宣さん29万票近くを得る

先月(3月)中旬に行われた千葉県知事選挙に、「憲法がいきる明るい千葉県をつくる会」の要請に応えて健闘された三輪定宣さんは、前回の「明るい会」候補の得票を2・1倍の288,762票に、得票率を3倍以上に伸ばしました(6・1%から18・4%へ)。投票率は前回よりも14ポイント下がった31・96%でした。候補者は3人でしたが、事実上の一騎打ちで、相手は現職の森田健作氏、123万票余の再選。

三輪さんは、次のようにわが研究所との関係を述べています。「全教等の組織を基盤とする東京の民主教育研究所に先駆け、新潟県では個人会員による『にいがた県民教育研究所』が設立された。私も、同県小出町千溝小学校の共同調査や『市民立』研究所を志向された碩学、故八木三男所長との縁で会員となり『にいがたの教育情報』にしばしば寄稿した」とされ、「日本の教育運動における『にいがた県民教育研究所』の役割と課題」を始め15本の論考を挙げています。

三輪さんは「憲法がいきる明るい千葉県をつくる会」代表として、活動されています。(吉)